ジェンダー視点で保守化を読む

『女性たちの保守運動
——右傾化する日本社会のジェンダー』
鈴木彩加
人文書院、2019、344頁、4950円（税込）

中嶋みさき
なかじま・みさき
女子栄養大学教員・教科研常任委員

東京五輪を前に、日本社会のジェンダー平等意識はかつてないほど高まりをみせている。だがLGBT理解増進法案の国会提出自体が見送られたように、ジェンダー平等への拒否感が薄れてはいない。東京五輪・パラリンピック組織委員会前会長森喜朗氏の女性差別発言に対しても、政府の反応は当初鈍かった。ジェンダー平等を後退させるバックラッシュ（1998年頃〜）の影響は残り、それを支持する女性も少なからずいる。

鈴木彩加『女性たちの保守運動　右傾化する日本社会のジェンダー』（人文書院2019年）は、「新しい歴史教科書をつくる会」「在特会」「日本会議」等保守運動の中の女性に焦点を当て、もともと女性蔑視を含む保守運動に、女性が参加する理由を明らかにした労作だ。運動体として主流の「日本遺族会」、「日本女性の会　そよ風」「愛国女性の会花時計」等を取りあげると共に、草の根女性団体の参与観察も実施している。同様に主要メディア『正論』等と草の根女性団体ミニコミ誌をとりあげている。そして女性の保守大衆運動の広がりを、グローバリゼイションによる「流動化現象」から生じる不安とは異なる、ドメスティックな女性運動ととらえる。ドメスティックには、家内、国内の意味があるが、鈴木は、保守女性が家族に価値をおく一方、慰安婦問題では日本の女性らしさを強調し、排外主義的態度をみせる意味で使用している。運動で保守女性らは、主婦として、地方社会やそこで生きる家族を支える（ケア労働する）ことが尊重されない姿や、性暴力を受けた場合に男の欲望の客体として貶められ差別される悲惨や苦労に配慮する姿を見せる。それはフェミニズムの原点と重なると鈴木は指摘する。妻・母という役割によるケア労働が評価されない社会構造、男社会における女性性の二重基準（保護されるべき母と男性の性欲の対象として客体化された娼婦の両方が求められる）、という二つの課題は、保守女性にもみられる。実に興味深い指摘だ。ただ鈴木によれば、保守女性は社会構造を変えようとはせず、そこに家族を支える労働からの疎外や男の性的欲望の視線にさらされる生きづらさからの解放を求めるフェミニズムとの違いがある。彼女らは、男社会から批判されない良き母・恥をしる女性として安全な立場に身をおきながら、家族の円満な生活を保つことを脅かされないように行動していると鈴木は解釈する。読者はそこで、彼女たちの行動を駆り立てる日本社会の女性蔑視の根深さに気づく。その行動に誤った情報が影響を与えていることも本書は示している。だがフェミニズムと共通する課題を抱えながら、社会は変えられないと思いこまされている姿に、私は学校教育の影響をみる。女性差別撤廃条約は批准されても、教科の中の家庭科の位置づけは低く、包括的性教育が実施されない教育課程は継続しており、女性蔑視を温存する社会制度は変わらない。この学校教育の発する隠れたメッセージが、まじめな女性を保守運動におしやる役割を果たしている。

ここでミソジニー（女嫌い）やミサンドリー（男嫌い）に関心があれば、ケイト・マン『ひれふせ、女たち——ミソジニーの論理』（慶応義塾大学出版会、2019年）、ポール・ナサンソン、キャサリン・K・ヤング『広がるミサンドリー——ポピュラーカルチャー、メディアにおける男性差別』（彩流社、2016年）をお勧めする。日本社会の根深い女性蔑視の形成は、良妻賢母という規範の形成と深く関わる（小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1991年）。その江戸期との関連性を解明する関口すみ子『御一新とジェンダー』（東京大学出版会、2005年）と沢山美香子『性からよむ江戸時代』（岩波新書、2020年）は面白い。特に沢山は、江戸期に農民層にまで普及した家の継承をめぐり、性の二重基準が生成されたことを、小林一茶の日記や、不義の子をめぐる藩の裁定の記録といった庶民の生活を切り取る史料を読み解く。しかし継承すべき家業や家産（家）を所有しない庶民には、女性蔑視が構造化した近代においても、良妻賢母や性の二重基準にとらわれずに生きる余地もあった（川原ゆかり「日本文化とジェンダー」『道徳を問い直す「国民の道徳」批判』水曜社、2003年）。現在、家業・家産（家）の継承は失われつつあり、労働は流動化している。森前会長を辞任に追いやった人々の声の広がりには、保守女性を含む人々の旧態然としたジェンダーに対するやりきれない思いがあったのかもしれない。